（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏名　久保　幸子

本論文は、ブルガリア出身のユダヤ系ドイツ語作家・思想家エリアス・カネッティ（1905－1994年）のライフワーク『群衆と権力』（1960年）を、＜本書は読者に、希望を探すよう強いる＞という著者自身の言葉に導かれつつ論じたもので、立論における論者の問題意識は次の三点に要約できる――１）他の多くの群衆論とはちがって、カネッティはなぜ群衆を肯定的にとらえるのか、２）この書物において群衆と権力はいかなる関係にあるのか、３）この書物に見出すことができる希望とは何であるのか。

論者はまず「群衆」概念の歴史を概観したうえで、カネッティの群衆論を、群衆を否定的に捉えるル・ボンの『群衆心理学』（1895年）およびフロイトの『集団心理学と自我分析』（1921年）と比較・考察し、カネッティの群衆概念が、脱階級イデオロギー的かつ脱種族イデオロギー的なものであること、そして、個的存在という人間の近代的自己認識からの解放の可能性をもつ自己認識のあり方を謂うものであることを論証する。続いて、考察上の比較対象をＨ・ブロッホの『群衆狂気論』（1941年）に求め、ブロッホが描く「＜狂気的＞群衆 対 （群衆を操作する）＜合理的＞権力」という構図に対して、カネッティは「狂気」概念を群衆概念から切り離すとともに、「死」という「根源的害悪」を操作手段として用いる権力にこそ「狂気」を見てとっていることを確認する。さらに論者は、カネッティの戯曲『期限をつけられた者たち』（1952年）に描かれた「死」と「権力システム」の関係を手掛りとして、『群衆と権力』に叙述される、システム的認識形態から自由な「変身」および「文学的な不死」のモティーフが、死と権力の関係の克服を、そして権力からの解放を志向するものであることを論証し、最後に、『群衆と権力』に見出される「希望」とは、「群衆」的存在という自己認識と「変身」による他者理解に基づく「文学」に託された、「人間解放」――個的存在という自己認識からの解放、狂気という概念からの解放、死と権力の関係の克服、そして権力からの解放――への希望である、と結論する。

本論文は、『群衆と権力』における群衆論と権力論を、諸文献を批判的に吟味しつつ詳細に分析し関係づけ、そこに孕まれている「希望」の内実に独自の解釈を加えたものとして大いに評価できる。他方、この書物の叙述を根底において支えているカネッティの思考方法と叙述形式の特異性については、踏み込みがまだ充分ではなく、この点が今後の課題として残されている。ただし、これは上述の功績を損なうものではない。

以上により、本審査会は、本論文が博士（文学）の学位に値するものと判断する。